

アナログメディアのリバイバルにおける「ハイ・ファイ」と「ロー・ファイ」

中村 将武 (東京大学)

録音再生機器や音響メディアに関しては伝統的に「ハイ・ファイ(Hi-Fi)」、つまり音響的な忠実性が高い状態が中心であるように扱われてきた。そのような傾向を反映して、Sterne(2002)やThompson(1995)などの聴覚文化論や技術史などの研究も、その構築性を暴く批判的な形ではあるが「ハイ・ファイ」を主題としてきた。このような状況において、忠実性が低い状態である「ロー・ファイ(Lo-Fi)」は積極的に論じられては来なかった。このような状況を踏まえ本発表では、一般的に「ロー・ファイ」とされることの多いアナログメディアの受容を分析し、これまでの研究では焦点の当てられなかった録音再生機器に関する「ロー・ファイ」に関する検討を行う。具体的には2010年代におけるレコードやカセットテープなどのアナログメディアの流行を対象として、当該年代の主に日本における、雑誌、新聞、インターネット上の記事などの言説の分析を通してそれらを取り巻く価値について明らかにする。

言説からアナログメディアのリバイバルは当然ながらその「ロー・ファイ」性により評価される面を持っていることが明らかになる。ただし、それは従来述べられてきたような音響的、技術的な忠実性の低さではなく、Harper(2014)が「ロー・ファイ・ミュージック」という音楽ジャンルに関して述べた、「ロー・ファイ」と関連しながら音楽やそのアーティストの純粋性やプリミティブ性、あるいはアマチュア性などの諸価値と関連するような、より広義の「ロー・ファイ」である。ただし、Harperが述べた特徴が全てこのリバイバルに当てはまるわけではなく、アナログ性による「ロー・ファイ」の評価など、「ロー・ファイ・ミュージック」と異なる特徴も存在する。また、多くの言説においてノスタルジアとの関連が述べられており、しばしば「ロー・ファイ」であることとノスタルジアが同一視される傾向が確認できる。

以上のように広義ではあるが、アナログメディアは「ロー・ファイ」性と関連づけられ理解されている。一方で「ハイ・ファイ」な点でそれら进行评估する言説も確認された。このことは音響再生技術における進歩史観の影響の強さを示すとともに、一方でこれまで述べられてきた技術的な進歩史観と異なる形での「ハイ・ファイ」の存在を示しており、当概念に関しても従来のような一元的な捉え方ではなく、その多様性に関する検討の必要性を示唆している。

以上のように、本発表は、これまでの研究で行われなかった「ロー・ファイ」なメディアとして、アナログメディアのリバイバルに関する検討を行った。アナログメディアのリバイバルについては、「ロー・ファイ」だけでなく「ハイ・ファイ」も加えた両者が絡み合いながら、それらを取り巻く様々な価値との関連の下に理解される複雑な事象であることが明らかになった。